

活けるキリスト夏期聖会(1) (箱根)

聖意体現

——マタイ伝6章9～13節——

(「活けるキリスト」誌129号 1976年11月号より転載)

1976年7月25日

小池辰雄

天の聖者 聖と贖い 文珠のはなし 山上の大告白第一言が鍵 聖霊は完全性を持った霊 ひ
とりびとりは天下一品 私を通して聖意・聖業を！ キリストと融合した生活 聖意を体現せ
ん

●天の聖者

「ハギアステートー ト オノマ スー」

直訳すれば、

「聖名が聖とせられんことを！」

「聖」ということばはヘブライ語では「カードーシュ」で、これは聖書を貫いていますけれども、特にイザヤ書において預言者イザヤは、

「イスラエル聖者」(イザヤ5・24)

と言いました。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍のエホバ」(イザヤ6・3)

とありますが、イザヤが召命を受けた時に、このことが一番のポイントです。

聖者は遠くの方におられるかと思つたら、イザヤ書57章15節に、

「聖者は、心の砕けた者の中に入ってきてこれを活かす」

という消息が書かれてあります。極めて大事な消息です。天の聖者、聖なる神は人を審くのではないのです。

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者

がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだ

る者と共に住み、へりくだる者の心を活かす』

とたたみかけて書いてあります。

「しようがありません」

と言つて聖前にひれ伏せば、その中に入って来てくださる。聖なる世界は、ある意味において次元がちがうからこわい。けれどもこわがることはないのです。み霊の神様は、入つて来て聖なる世界に変えてしまう。この聖なるものは熱き愛をもっている、冷たくないで



すよ、この聖は。火のような浄化作用をなさったり、また、水のような溶解作用で潤し給うのです。

●聖と贖い

そして、この聖なる者が、救済をもたらすものであるのです。これは例えば、コリント前書1章30節に、

「彼は神に立てられて、汝らの知恵と義と聖と贖いとなり給えり」

この「聖」と「贖い」ということが、イザヤ書に於ては対句のようになって書いてある。「聖なる者は救う」ということが、よく書いてあります。すなわち、

「聖者は、救済する者であり、救贖する者である。審く者ではない」

これが聖書における聖者です。キリストは聖者です、まさに神の聖者です。ところが遊女や取税人や癩病人や、精神的、また肉体的な極限状況のいろいろな人たち、そのような人たちに近づいてゆかれたではないですか、半死半生の傷だらけの旅人に近づき担い上げたよきサマリヤ人の話の通りです。

ところが、祭司や学者やパリサイ人は、それから遠ざかって、見て見ぬふりをしたり、けがらわしいといっておのれをきよしとする偽善者たちでした。私はある時、無教会のある伝道者と池袋を歩いたことがありました。そうすると、街の女が近づいて来ました。

「けがらわしい!」

とその人は言いました。ああ、無教会の潔癖の冷たさよ。ああいう人たちの中に、実は純情な魂がある。キリストはそういう遊び女を本当の喜びの世界に救ったではないですか。

●文珠のはなし

「小なる隠者は山にかくれ、大なる隠者は街にかくれる」

という。こういう話もある。お釈迦さんの弟子の文珠のはなしです。やつぱりこれも夏ですよ、修養会をやったわけです。そうしたところが、文珠のやつが知らぬ間に姿を消した。そうしたら、ある弟子が、

「文珠のやつは紅燈の巷に行つて遊んできたのです。悪いけしからん野郎です。お

釈迦さん、あれを鞭でもつて罰して宜しいか」

と言いました。

「そうか、それじゃあ、やつてごらん」

という。お釈迦さんは一応、諾しました。そうして、文珠を捕えてこれを打擲しようとしたら、振り上げた鞭が動かなくなつた。そのうちに、

「そこに環座して、並み居る者、ことごとく文珠となつた」

という現象が起きてしまいました。それはどういうわけですか。文珠は、実は紅燈の巷に



行つて、救いを施してきたわけでした。だから文珠には仏の霊がみちあふれていた。それで文珠を見ているうちに、みんな文珠に化せられてしまったのです。

本当に福音の証者キリストはそういう角度で、人の隔てはなさらない。大慈大悲の神は、
「直き者にも、直からざる者にも、正しき者にも、正しからざる者にも、雨を

降らせ、陽を照らす」

という。恵みは一視同仁にきている。問題はこちらがわで恵みを受けるか受けないかというだけの話。神の恵みは、

「あいつは悪いやつだから、少し陽の光を薄くしておこう」

なんてなさらない。天恵を無条件に受けければ、化せられていくのに、一番大事な福音を、

「まあ、それだけはいりませんよ」

とやっているのが文化人文明人の一般なのです。伝道者、牧師さんたちも責任があります。御霊の世界にない者が伝道したって、たましいの変革は起きないのです。いわゆる神学校を出たから伝道者になれるというものではないですよ。伝道の資格は単なる水のバプテスマじゃだめ。聖霊のバプテスマを本当にじかに受けることにあります。

だから、私たちは、どんなに小ぢやかな駄目な奴でも、質的には使徒と同質の世界に、いよいよ限り無く入って往こうじゃないかというわけです。要するに、我らの主キリストは救いをほどこす聖者ですから、キリストの聖名を「聖とする」という祈りは聖名を「救い」とするということと同じことです。「聖なる救主よ！」であります。

●山上の大告白第一言が鍵

「エルサトーへー バシレイア スー」

直訳すれば、

「聖国の来らんことを」

です。この祈りは、わが内に御国が来ていなければ祈れない。その鍵を「山上の垂訓」の第一言において私は発見したのです。

「幸なる哉、貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ5・3)

ルカ伝の方では、

「幸なる哉、貧しき者よ、神の国は汝らの有なり」(ルカ6・20)

と書いてある。聖書に「その人」とか「彼ら」とか三人称で書いてあっても、それをわがこととして一人称でよみなさい。聖書はドラマですから、劇中におどりこんでよむに限ります。そうすればおのずから一人称になって来ます。

「幸なる哉、霊の貧しき者」

という。ところが、人間はみんな霊が貧しくない。「罪人」とは、そのことですよ。みんな我にとらわれている。本来は、我をだんだん拡張し、伸ばそうとする衝動はわるくない。



神はそういうように造っておられるのだから。我々の意志だとか、感情だとか、知識欲だとか、神様が下さっているものは悪くない。ただし、その衝動が、神様からの賜わりたる我であることを忘れている。自然の我だと思っている。賜わりたる我は、神のもの、神にお返しするもの、神の栄光を現すものではないですか。

財産でもそうですよ。私有、公有と言っている。ところが、もう一つ、神有しんゆうということも忘れてる。だから、私有や公有を本当に使うことを知らない。どの政党でも、もう一つ奥の神有の世界を持たなければだめだ。日本にそれだけの自覚を持った政治家がいるか。そのうちに現れるかも知れない。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と。私たちは、貧しくなれない。キリストは貧しかった、キリストの言葉は全部告白で、教えではないのです。キリストは御自分で体験なさらないことは、一言もおっしゃらない。キリストは神の前に平伏ひれふして、何者とも思っていない。これが霊の貧しいということ。自分を何者ともしないことです。そしたら、天国——キリストにとって天国とは神様のこと——神様はキリストの中に入ってきた。そのことを山上の大告白(垂訓)第一言で私は気が付いた。だけど、私は、キリストのまねをしようたって、できない。だから、キリストの中に入るより仕方がない。

「幸いなるかな、汝、わが十字架によって、我執からのけられた者よ、罪ゆるされ
た者よ」

そういう我執的存在が、ゆるされ、のけられた天国、すなわち、

「聖霊が汝のうちにあり!」

と、こう響いてきた。その時に、私は畳の上にひれ伏してしまった。御霊に撃たれて! これは私個人の一個の体験でした。

あの一句がそのように受けとれたら、即ち十字架と聖霊の事態が来たら——キリストという御霊の霊核が入ってきたら、わたしは霊子れいしということになりました——もう福音書がみんな読めちゃったです。これが福音書の鍵なのです。鍵が開いちゃったのです、第一言が読めたら。なんて楽しいか、キリストの言葉はどれも。だけれも、御言葉に添うことはできない。激しい聖言がたくさんあります。キリストは水を割らずに言っている。そして、

「こういう場合はこうだ」

なんておっしゃらない、全部、断言命法です。学者というのは、

「ああいう時はああだ、こういう時はこうだ」

と条件的、分析的な言い方をします。キリストは、無条件のもの言い方です。

●聖霊は完全性を持った霊

一番すごいのは、



「汝ら、天の父の全きまつたがごとく全かれ」(マタイ5・48)

だれがこれに及第できませんか。それをキリストが言っておられるんだから、何が福音ですか。できないことばっかり書いてあつて福音だなんて言つて、キリストは困った人だね。

「福音だ、喜びの音おとずれ信だ」

なんて、喜びじゃなくて苦しみの音ずれだ。だが、聖霊は完全性を持った霊です。

さつき、三日月が出ていたね。上弦の月。これは、三日月だけれども、必ず満月になることを約束されている。すなわち、三日月でありながら、満月性を持っている。不完全でありながら、完全性を持っている。私たちは、どんなにだめなものでも、マイナス99の間でも、1という完全性を持っている。み霊の現実では、この1がマイナス99を必ずやつけてしまう。地上ではだめだ。けれども、

「この完全性のゆえに、もう完全に救われている。だからいよいよ完全に向かつて前進せよ」

という。救いの確かさというのは、よく言われています。なかには、

「私の信仰はまだだめだから、どうも救いの確かさが来ません」

なんて言う。キリストが、

「信仰の薄き者よ」

なんておっしゃったから、

「厚くならなければいけない」

とこう思う。あのね、イエスの言葉につまづいてはいけませんよ。信仰は相対的な判断をしているうちはだめです。1から99までは本当の信仰ではない。信仰というのは100%のこと。これは完全性なんです。辛種からしだね一粒です。

「辛種一粒の信があれば、この山に向かつて動け、と言えば動く」

その信は祈りの世界において御霊を受けている。三日月即満月！御霊が来ましたから、

「父の全きまつたがごとく全かれ」

「はい、私の中には、全きものがあります」

ということが言える。だから福音、喜びの音ずれなんです。不可能なことは、キリストの中に入ると全部、可能になってくる。現象面でどれくらいずれがあつても。そんなことは心配いらない。質的に、根源の現実で私たちは根源現象を起こして進まん。もろもろの病にも、罪にも、根源においては、キリストの力で勝っている。つまずいたり、ころんだりしますよ。けれども勝っている。そういう、非常に積極的な福音であります。これは聖霊の世界に来なくてはだめです。

●ひとりびとりは天下一品

「御国みくにを来きたらせ給え」



というのは、御国は、聖霊が来ているから、即ち御国の中核、双葉がちゃんとあるから、必ず来る。20世紀はひっくり返つちゃうかも知れない。1999年が危いとノストラダムスが預言したが、21世紀が無事に迎えられないかも知れない。けれども、神の国は必ず来ます。だから、遺れる民は信仰の実存を以て待つべしです。

「ナツハレーゼ」(Nachlese) という言葉がありますが、「落穂拾い」のことです。そこらの落穂を拾わなければいけない、こぼれている神の民を。皆さんひとりびとりが伝道者ですから、今橋さんという専門の伝道者に大いに協力してください。道を伝える者。

「道」という言葉は、私は大好きなんです。日本人は本来、道の民なのだから。茶道、剣道、柔道、弓道、書道、華道——術じゃない——道なのです。実存を以て伝えるのが道なのです。真理が身につけているのを道という。だから、本来、日本人の道は、師道、孝道でありました。そしてこれは今もそうでなければダメです。キリストこそ本当に師道孝道を神に対して歩いた人です。父なる神の言を身を以て現した最大の弟子であり、親孝行者です。

「平等」という言葉がありますが、間違つてはいけません。ひとりびとりは天下一品なんです。しかもひとりびとりに対する神様の愛し方は、みんな違う。キリストも同じ愛し方はしていないですよ。

「あの人は愛されているが、私はちよつとだめだ」

なんて、そんなことはない。一人びとりへの愛の内容が違うのです。ある人は、えらく患難に会うかも知れない。けれどもキリストは、その人を患難を通して本当に深く愛してくださる。パウロの生涯をみてもその通りです。彼は歓喜にあふれていたではありませんか。

だから、キリストの天道が地上ではひとりびとりの地路に即する。自分の足でもって歩いている地路、それが天道に即しているのです、信仰の現実では。そこに本当の実存というものがある。そういう実存においてこそ、

「御国を来らせ給え」

の祈りが祈られているわけです。

●私を通して聖意・聖業を！

「ゲネーセートー ト セレーマ スー」

「汝の御意の成し遂げられんことを」

これは、「主の祈り」の、ある意味において中心です。主の祈りには中心が二つある。楯の二中心点。キリストは、私たち人間と同じに、自分の気持を持っていらつしやう。ゲッセマネの祈りでは、

「この苦杯は何とかしてやめてください。だけれども、私の気持ではない、あなた
の御意が成りますように」

と。十字架にかかる前の、乾坤をかけたの祈りです。あの祈りでキリストはサタンに勝つ



て十字架への道に進んだ！ 十字架の死は既にガリラヤからエルサレムに向かう時、もうその覚悟で立ち向かって来られた。

「**聖意の成らんことを**」

という。ここでキリストは。

「どうぞわたしを通して」

とはおっしゃらない。けれども言外には勿論あります、提身して祈っておられるからです。一般にはこの祈りの文句を三人称的に、

「**御意がなりますように**」

と傍観的に祈っているだけです。私は注解書に「私を通して」という意をはっきり洞察しているのをまだ知らない。

「どうぞ私を通して成してください！」

と、自分を投げ出している祈りなのです。これが貫いている神の御意です。もう、聖意という言葉では表わせない。むしろ聖業と言った方がいいくらい。神の物凄い行為です。

だから、キリストは提身しておられる。その提身は、同時に神の中に入っている。神の中に提身しているのですよ。

皆さんは今、どこにいるのですか、空気の中にいるでしょ。けれども空気の中にいることを自覚していない。また空気を吸っているでしょ、寝ても覚めても気の世界です。私たちは大気に囲まれ、空気を吸って肉体は生きています。われわれの魂は、キリストの靈氣に、御靈に囲まれ、御靈を吸って生きています。そのことにハタと気がつかなきやいかんですよ。あの詩篇139篇7節にある通り、

「**我いずこにゆきて汝の聖靈をはなれんや、われいずこに往きて汝のみ前をのがれんや**」

です。だから、ごまかすことはないですよ、

「こんなだめな者ですが、どうぞお使いください」

と、あるがままの姿で自分を投げ出してください。

「もう少し勉強してから、もう少し実存がよくなってから、もう少し聖書の研究をしてから、お使いください」

なんて言うならば、いつになったらいいのですか。今、即刻です。実は毎日がそのような提身なのです。だから、

「**聖意をこの私を通して成してください**」

という祈りは、最も激しい祈りなのです。自分を投げ出している祈りです。その投げ出しにおいて、何かなしたいお願いを、遠慮なくお願いしてくださいよ。もうそのときは自己中心じゃないですから。投我においてキリスト中心になっているからです。



●キリストと融合した生活

今でも交わっています。祈りの深い青年があった。お母さんが、癌にかかった。名古屋の病院にお母さんの看護に行つて、お母さんのために祈り出した。そうすると、

「明日は体温が何度になる」

と示される。その通りになっていく。幾日か祈りつづけているうちに癌が治っちゃったですよ。それで、そのお母さんはその後20年位生きていらつしやつた。その青年は帰京してみると、翌日は試験です。2週間、お母さんのために祈つたんだから、翌日の試験の準備ができていないというわけだ。それで今度は本を開いて、

「神さま、助けてください」

と祈つて読んでみると、パツ、パツとひらめきがくる、

「ここは大事なところだ」

と。翌日、試験を受けたら一番ですよ。その人から聞いた話です。神様は、本当の在り方をしていれば、いざとなれば助けてくださる。崖から落つこちた瞬間に、

「主さまー」

と言つたら怪我をしなかつたと、そういう話も聞いています。

とにかく、キリストと一つということが、普段の生活の中で融けた現実となってくるのが大切。例えば電車に乗つて、つり革につかまりながらキリストにつかまっている境地、といった具合に。

「戸を閉じて祈れ」

と。満員電車で目を閉じて祈る。雑音なんか聞こえても、霊の世界は静かです。そして、

「主さまー」

と沈黙の雄叫びの祈りの世界。降りる時には、もう力がついちゃっている。まあとにかく、自在なことになります。一般の生活問題、労資の問題、学校の問題、みんな一番奥の世界が欠けているのでどうにもならない。

●聖意を体現せん

「ホース エン ウーラノー カイ エピ ゲース」

「天におけるごとく、地においても」

天上においては、本当の現実界。プラトンに言わせれば、イデアの世界。このイデアの世界がかくれた現実で、それがあらわな現世に現象すればよいのである。プラトンは、「アナムネーシス」(想起)ということを言いました。すなわち、地上は本体界の現象界である。本体界を想起するところに本当の現象界の意義があるとなした。

「本体界(実相界)におけるごとく、現象界のこの地上においても、どうぞ、この私たちを通して現象してください」



というところに福音の世界の悲願がある。これを聖意体現と私は申します。聖なる意志を体をもつて現ずる。キリストはまさに完全に聖意体現をして、地上を歩かれた。そういう聖意体現が義というものです。だからイエスは本当の義人でした。

「義人は永遠に生きる」

のです。だからイエスは、変貌の山で靈化^{れいか}してしまつて、エリヤよりもすばらしく、いきなり天界に入ることでもできた。

けれども、キリストは、する「天界に入る」わけにいかなかった。いきなり神様のところへ行きかけたけれども、人類の罪を、滅びをいかにせん。この罪と死と陰府^{よみ}とサタンに完勝するためには、十字架の贖いをもつて、全存在の復活をもつて、聖霊の降臨をもつて——この三つは離すことはできません——成就しなければならぬ。だから、十字架と復活と聖霊降臨と、これはちゃんとキリストが見通しておられた、切つても切ることのできない三相一貫の事態であつたのです。だから、

「今にお前たちに現れるぞ、その時に、わたしが言つたり、したことが、今度は本当にわかるぞ」

と。キリストは天界から現れて、そして今度は聖霊となつて、ひとりびとりの中に完全にはたらき給う。一なるキリストはみたまのキリストとして無限に自在に現象するわけです。無即無限無量といっているのは、そのことなんです。これが、

「御意が天に成るごとく、地にも。どうぞこの私を通して」

と云うことであります。ですから聖意体現の可能因は正に聖霊の力であります。自分を無者としておられたイエスは、神のみ霊を十全に体受して聖言も聖業も自在に展開しておられたわけでありませぬ。

もう一つ言いかえると、神の本願力のはたらきで聖意が体現されるのです。我らはキリストの本願力を体受して、みたまの内住により、万難を突破して聖意を体現せん哉！（次号へつづく）

